

タマンセプテの校庭生まれ、第一回盆踊り

1974年～77年 KL日本人学校PTA
佐々木順子

2012年の7月のある日、車のラジオでマレーシアの首都クアラルンプールで今年も盆踊り大会が開催されたというニュースを耳にしました。ラジオのニュースに取り上げられるくらい盛大なイベントのようです。ニュースはこの盆踊りが1977年から36年も続いていると伝えていました。しかし、盆踊りがどういう経緯でKLで行われるようになったのか、そのいきさつには触れていません。

1976年にキアペン校舎からタマンセプテ校舎に移動し、校庭も広くなった新しい学校では、親子球技大会や父子サッカーなどが行われるようになっていました。そんなある日のPTA会合で、校長先生から「夏休みに盆踊りをやってみませんか？」と提案をうけ、「えっ？盆踊りですか？」と一同顔を見合わせました。盆踊りなんて踊ったこともなく、どうやって準備をすればよいのか見当もつきません。それでもやってみようと思ったのは、一年中真夏の気候のマレーシアで、「夏休み」に子どもたちに浴衣を着せて、夏祭りの季節感を味わわせたいと思ったからです。しかし前例もないこの計画に何処から手を付けてよいのか、実は手探りでした。



1977年(タマンセプテ校舎時代)の
JSKL大運動会 (現JCKL駐車場)



第1回盆踊り大会の櫓 (JSKL校庭)



舞台の広さ6f x 6f

まずは民謡のカセットテープや子供たちの浴衣を日本から取り寄せることから始めました。届いたテープで相馬盆歌や炭坑節を役員会で聞いていると、日本の盆踊りの光景が目には浮かびます。どうしても櫓(やぐら)が欲しくなりました。学校の用務員さんに相談し、地元の大工さんに簡単な絵を描き、素人判断で寸法を指示しました。私の手帳に残っている櫓の略図では、安定が良いようにやや台形の構造にし、地面から舞台までの高さ5.5ft、上部の梁までさらに5.5ft、舞台の広さ6x6ftとあり、上端に梁を渡し、舞台脇には手すりも付けたなかなか本格的な櫓です。予算は1,500ドルとあります。当時はマレーシア・リングギットをマレー「ドル」と呼んでいて、1ドルが120円前後でしたから18万円ほどの予算です。

立派な櫓が出来るとなると、裾飾りに紅白の幕も欲しくなります。もちろん紅白の幕をレンタルする業者があるわけもなく、思案の挙句ペタリン・ストリートの旗屋に出向き、赤と白の布をはぎ合わせた幔幕を作ってもらいました。

今度は照明です。檣から提灯を張り巡らさないと、盆踊りは格好が付きません。そこで思いついたのがインドの光のお祭りディパ・バリの飾りです。コードに連なった豆電球に、日本企業から寄付していただいた宣伝用の提灯をかぶせ、四方に渡しました。檣の上には中華学校からお借りした太鼓も置きました。工夫すれば何でもできる！ 私たちはワクワク気分でした。



背景には紅白幕やラジカセが写る



法被を借りて記念撮影する生徒



男子生徒も踊りを披露

この初回盆踊りは、実際は夏休み中ではなく9月3日に実施されています。夏休みから子供たちが戻ってきた最初の週末です。盆踊りの当日、夕方まだ明るいうちから三々五々、子どもたちと父兄が校庭に集まってきました。夕食には日本料理店のお弁当を注文してあります。何もかも普段と違う特別なことの連続で、子どもたちははしゃいでいます。

日が落ちる頃、いよいよ盆踊りの始まりです。提灯の明かりが真ん中の檣を浮かび上がらせます。スピーカーから懐かしい民謡のメロディが流れ、太鼓の音が威勢よく響きわたります。やがてスピーカーから聞こえてくる日本の音楽に、校庭の後ろの崖の上に地元の人たちの人垣が出来始めました。それに気づいた私たちが「下りてきませんか？」というしぐさで誘ってみたら、二人、三人と下りてきて、踊りの輪に加わり始めました。あとはどんどん輪が広がり、身振り手振りで炭坑節や花笠音頭を踊っていました。日本人もマレー人も中国人もインド人も一つの輪になって賑やかに盛り上がり、時間の経つのも忘れて踊り明かしたのです。

KL恒例の盆踊りは、こうしてタマンセプテの校庭で、マレーシアの人々も参加して始まりました。第37回の盆踊りを拝見する機会を得ましたが、あの盛大なイベントもささやかなPTA行事の「第一回」があつてこそ。と同時に、KL日本人会や関係者の皆様のご尽力でこのイベントが受け継がれ、発展してきたからこそ、「第一回」も意味を持つのだと、いま感慨深く回想しています。



喜びあふれた学校行事